

古アルメニア語統辞法の 若干の問題について

千種 眞一

キーワード: 福音書翻訳, 疑問文, 従属化, 接続法, 異訳

0. ゲルマン語において聖書翻訳の最も早い文献を有する言語はゴート語であった。一般に、その翻訳は原文にきわめて忠実な逐語訳であり、加えて、写本の成立した6世紀頃にゴート人筆写生に知られるようになった、ウルガタ聖書以前の古ラテン訳聖書の影響も少なからず見られる、と考えられている。その一方で、ゴート語翻訳はとりわけ語順に関してギリシア語原文に忠実ではあっても、翻訳者ウルフィラ（あるいは後代の筆写生も含めて）はゴート語らしいゴート語を綴っていたのである、という見解も表明されている。この立場をより鮮明にして、最近 Klein (1992) は、ゴート語の聖書翻訳にその統辞法の独立性を見出そうとする比較統辞法的な分析を試みた。ゴート語が内的に一貫した統辞法的規則の集合からなる一つの言語体系であれば、我々に残された文献が主として翻訳に限られていたとしても、その翻訳がゴート語自体の規則に従って行われていたと考えるのは不自然ではない。同様のことは、聖書翻訳における古アルメニア語にも当然予想されるであろう⁽¹⁾。本稿では、疑問文、複文、動詞句における態・時制・叙法の諸相、さらにアルメニア語に固有の構文的特徴に関して、ギリシア語本文との異同を中心に、必要に応じてゴート語訳とも対照させながら、福音書翻訳においてどのようなアルメニア語的特徴が見られるのかを考察する⁽²⁾。

1. まず疑問文について考えてみよう。疑問は一般に、聞き手から新しい情報を引き出す代名詞的疑問と相手に確認を求める諸否疑問に分けられる。何にもましてゴート語に独自の特徴とされているのは、諸否疑問で前倚辞 -u を用いることである。たとえば Jh 18,39 *wileid-u nu ei fraletau izwis pana piudan Iudaie?* = *βούλεσθε οὐν ἵνα ἀπολύσω ὑμῖν τὸν βασιλέα τῶν Ἰουδαίων;* = Arm: *ard kamik' zi arjakec'ic' jez z-t'agawor-n hrêic'* 「あなたたちは今、ユダヤ人の王をあなたたちに釈放してほしいか」; Jh 9,35 *pu ga-u-laubeis du sunau gudis?* = *σὺ πιστεύεις εἰς τὸν υἱὸν τοῦ θεοῦ;* = Arm: *dow hawatas? y-ordi AY* 「あなたは神の子を信じるか」。これらの例からも明らかかなように、アルメニア語の疑問文は分節的に無標であって、ゴート語のように疑問に特有の小辞を用いない点でギリシア語と同様であるが、イントネーションの置かれる位置が文末ではなくて、疑問の対象となる語であるという点でギリシア語と異なっている (paroyk と称

される疑問の標識は写本で強勢音節の母音の上に置かれるが、本稿の転写では当該語の直後に疑問符を付して代用する。もとよりゴート語においても諸否疑問は分節的に無標の形をとり得る: 4,34 qamt fraqistjan unsis? = ἤλθεῖς ἀπολέσαι ἡμᾶς; = Arm: ekir korowsanel? z-mez 「あなたは私たちを滅ぼしに来たのか」。

ギリシア語においては、周知のように、話し手が聞き手に否定ないし肯定の返答を前提とする場合、否定小辞を用いて疑問文をつくる。否定の返答を予期する問いは μή / μήτι により導かれる。アルメニア語は mit'e / mi t'e しか用いないが、ゴート語は ibai / nibai / jau など多様な形態を用いる点で特徴的である。ただし、次に掲げる例はゴート語で分節的に無標の疑問文である: 5,34 mit'e karoſ? êk' (直) mankanĉ' aſagasti. minĉ' p'esay-n ənd nosa ic'ê hraman tal parhel = μή δύνασθε τοὺς υἱοὺς τοῦ νυμφῶνος ἐν ᾧ ὁ νυμφίος μετ' αὐτῶν ἐστὶν ποιῆσαι νηστεύσαι; = Goth: ni magud sununs brufſadis, unte sa brufſads miþ im ist, gataujan fastan? 「あなたたちは、新婚の部屋の子らに、花婿が彼らと一緒にいる間、断食させることができるか」。ibai: Jh 9,40 ibai jah weis blindai sijum? = μή καὶ ἡμεῖ τυφλοῖς ἐσμεν; = Arm: mi t'e ew mek' koyrk'? ic'emk' (接) 「まさか私たちも目が見えない [と言う] のではあるまいね」。nibai: Jh 7,35 hvadre sa skuli gaggan, þei weis ni bigitaima ina? nibai in distahein þiudo skuli gaggan jah laisjan þiudos? = ποῦ οὗτος μέλλει πορεύεσθαι ὅτι ἡμεῖς οὐχ εὐρήσωμεν αὐτόν; μή εἰς τὴν διασπορὰν τῶν Ἑλλήνων μέλλει πορεύεσθαι καὶ διδάσκειν τοὺς Ἕλληνας; = Arm: isk yo? ert'ayc'ê da zi mek' oĉ' gtanic'emk' z-da' mi t'e i sp'iirs? het'anosac' ert'ayc'ê (接) ew owsowc'anic'ê (接) z-het'anoss 「この男はどこへ行くこうとしているのだろう。私たちがこの男を見つけなくなるとは。まさかギリシア人の [間に分散している] ディアスポラに行って、ギリシア人を教えようとしているのではあるまい」。jau: Jh 7,47-48 ibai jah jus afairzidai sijub? sai, jau ainshun þize reike galaubidedi imma aiþþau Fareisaie? = μή καὶ ὑμεῖς πεπλάνησθε; μή τις ἐκ τῶν ἀρχόντων ἐπίστευσεν εἰς αὐτὸν ἢ ἐκ τῶν Φαρισαίων; = Arm: mi t'e ew dowk' molorec'arowk'? (接) mi t'e ok' y-išxanac'-n hawatac'? (直) i na' kam i p'arisec'woc' 「まさかお前たちまでたぶらかされてしまったのではあるまい。指導者たちの中で、あるいはファリサイ派の人々の中で、彼を信じた者などまさかいるまい」。さらにゴート語では副詞 waitei が疑問小辞として 1 度だけ現れるが、ここでもアルメニア語は mit'e を用いて一貫している: Jh 18,35 waitei ik Iudaius im? = μήτι ἐγὼ Ἰουδαῖός εἰμι; = Arm: mi t'e ew es hrey? ic'em (接) 「まさか私がユダヤ人 [だと思っているわけ] でもあるまい」。ゴート語で ibai が直接疑問ではつねに直説法とともに現れるのに対し、nibai は希求法と用いられていることから明らかのように、ibai は話し手にとって否定の返答が明らかである疑問、すなわち修辭的な疑問を導入し、nibai は否定の返答が期待されながらもなお保証の限りではない疑問を導入している。他方、アルメニア語の mit'e 疑問文では、ゴート語に見られるような叙法による微妙な区別は行われず、直説法が現れる少数の例外 (上記 5,34. Jh 7,48 など) を除いて、もっぱら用いられる叙法は接続法である。

肯定の返答を前提とする疑問は οὐ / οὐχί によって導かれる。これに対応するゴート語の小

辞は *niu* あるいは *an* (*nuh*) であり、アルメニア語では *oč' / č'* である。たとえば 4,22 *oč' sa é ordi-n Yovsêp'ay?* = οὐχὶ υἱὸς ἐστὶν Ἰωσήφ οὗτος; = Goth: *niu sa ist sunus Iosefis?* 「この者はヨセフの息子ではないか」; 6,3 *č'-ic'ê? ont'erc'eal jer z-or arar-n Dawit'. yoržam k'alc'eaw* = οὐδὲ τοῦτο ἀνέγνωτε ὃ ἐποίησεν Δαυὶδ ὅτε ἐπείνασεν; = Goth: *ni þata ussuggwud þatei gatawida Daweid, þan gredags was?* 「ダビデが空腹だったときに彼がしたことを、あなたたちは読んだことがないのか」。次の例は、否定の返答を予期する疑問と肯定の返答を予期する疑問を同時に含んでいる: 6,39 *mit'e karc'ê? koyr kowri ařajnordel. oč' apak'ên erkok'in i korxorat ankanic'in* = μήτι δύναται τυφλὸς τυφλὸν ὀδηγεῖν; οὐχὶ ἀμφοτέροι εἰς βόθυνον ἐμπεσοῦνται; = Goth: *ibai mag blinds blindana tiuhan? niu bai in dal gadriusand?* 「盲人が盲人を道案内できるだろうか。[Arm: それでは] 二人とも溝に落ちてしまわないだろうか」。アルメニア語では頻繁に見られる *oč' apak'ên* (*apa* 「それでは、そうだとすれば」の拡張形) がギリシア語の否定の強調形に対応している。ゴート語で *an* は次の例に1度しか現れないが、その肯定を予期する談話的な機能は、質問されたことをそのままか、あるいは *þu qipis* を加えて繰り返す聞き手の応答に明確に示されている: Jh 18,37 *apa t'e aydpês ic'ê t'agawór omn es dow ... dów ases t'agawor ic'em* = οὐκοῦν βασιλεὺς εἶ σύ; ... σὺ λέγεις ὅτι βασιλεὺς εἰμι ἐγὼ = Goth: *an nuhþudans is þu? ... þu qipis ei þudans im ik* 「それではあなたは王なのだ。… 私が王であるとは、あなたが言っていることだ」。アルメニア語訳は原文と異なり、表面的には疑問の形をとっていない。 *apa t'e* は通常 *ei* *de* に対応し条件節を導くが、ここでは「もしそうであるなら、あなたは王である(ということになるか)」と訳され得るように、疑問を含意しながらも、話し手の側ですでに肯定的な判断が下されている表現と解される。

疑問詞疑問文において、アルメニア語の疑問詞は焦点として動詞の直前に位置するというのが原則である。たとえば上記 Jh 7,35a *isk yo? ert'ayc'ê da* のほか、Mk 9,33 *zinč'? vič'eik' zčanaparhayn ənd mimeans* = τί ἐν τῇ ὁδῷ πρὸς ἑαυτοὺς διελογίζεσθε; = *hva in wiga miþ izwis misso mitodeduþ?* 「あなたたちは道すがら何を論じていたのか」; Mt 13,54 *sma owsti? ic'ê ays imastowt'iwn ew zawrowt'iwnk'* = πόθεν τούτω ἡ σοφία αὐτῆ καὶ αἱ δυνάμεις; 「この知恵と力ある業とはどこからこの者に来ているのか」(この箇所はゴート語テキストには欠損している) など参照。最後の例では *owsti* の後に原文にない繫辞が補われて、この疑問詞を支えるような形になっている。また、次の例でも新約聖書ギリシア語とゴート語が同じ語順を示しているのに対し、アルメニア語では疑問語と動詞が連続している: Lk 9,20 *úmeis de tína me légete éivai;* = *apþan jus hvana mik qipip wisan?* = Arm: *dowk' z-ov? ok' asêk' z-inên t'e ic'em* 「あなたたちは、私のことを誰だと言うのか」⁽³⁾。

アルメニア語で選択疑問文は原則として最初の選択項には小辞を伴わず、通常は2番目の選択項に *et'e / t'e* を先行させる。ゴート語において選択疑問文は基本的に *-u / -uh ... þau ... -u / -uh* の形をとるが、特に疑問詞を用いた明示的な疑問文では、選択されるべき項にあえて疑問標識を付する必要があるために、ギリシア語やアルメニア語と同じように、*þau* の前後に *-u* を

欠く例も見られる:

- 5,23 zinč'ʔ diwragoyñ ê` asel t'ōteal lic'in k'ez mefk' k'o' et'e asel ari ew gna = τί ἐστὶν εὐκοπώτερον, εἰπεῖν ἀφέωνται σοι αἱ ἀμαρτίαι σου, ἢ εἰπεῖν ἔγειρε καὶ περιπάτει; 『あなたの罪はあなたには赦されている』と言うのと、『起きよ、そして歩け』と言うのと、どちらがたやすいか」

Goth: hvapar ist azetizo qiþan: afletanda þus frawaurhteis, þau qiþan: urreis jah gaggʔ

- 6,9 harc'íc' inč' c'-jez' zinč'ʔ aržan ê i šabat'ow' bari? inč' ařnel. et'e č'ar gorcel' ogi mi aprec'owc'anel? l'e korowsanel = ἐπερωτῶ ὑμᾶς τί [Nestle-Aland: εἰ] ἔξεστιν τῷ σαββάτῳ ἀγαθοποιῆσαι ἢ κακοποιῆσαι, ψυχὴν σῶσαι ἢ ἀπολέσαι; 「お前たちにたずねよう。安息日に許されているのはどちらか。善行をなすことか、悪をなすことか。[Arm: ひとつの] 命を救うことか、滅ぼすことか」

Goth: fraihna izwis hva skuld ist sabbato dagam, þiup taujan þau unþiup taujan, saiwala ganasjan þau usqistjan?

最初の例では hvapar ... þau に対応すべきギリシア語 πότερον ... ἢ γὰρ τί ... ἢ に置き換えられている。福音書において「二つのうちどちらか?」を意味する πότερον が用いられている例は次の箇所だけである: Jh 7,17 gitasc'ê vasn vardapetowt'ean-s y-ĀY ic'ê ardewk'. et'es (= et'e es) inč' y-anjñê immê kawsim = γνώσεται περὶ τῆς διδαχῆς πότερον ἐκ τοῦ θεοῦ ἐστὶν ἢ ἐγὼ ἀπ' ἐμαυτοῦ λαλῶ = Goth: ufkunnaip bi þo laisein framuh guda sijai, þau iku fram mis silbin rodja 「この教えについて、それが神からなのか、あるいは私が私自身から [Arm: 何か] 語っているのか、人は知るであろう」。アルメニア語では πότερον が訳されていないかわりに疑問を強める ardewk' を用いている点が注目される。ゴート語は上述の選択疑問文型の変種 -uh ... þau ... -u を用いるが、アルメニア語訳と同様に、ギリシア語の πότερον がもはや疑問代名詞としての資格を失い、ἢ と関連して単に選択疑問文を特徴づける小辞のようなものになっていることを踏まえた訳である。

2. 従属接続詞によって導入される従属節のうち、目的を表わす節 (purpose clause) はギリシア語で ἵνα (μή), ὅπως (ἄν), μή (μήποτε) + 接続法, ゴート語で ei (ni) + 希求法, アルメニア語では本来は疑問・関係代名詞である zi と接続法によって導かれる。ただし, ゴート語が主文動詞の時制に応じて希求法の現在形か過去形かが決定されるのに対し, アルメニア語接続法の形はすべてアオリスト語幹を用いている。次の例を参照:

- 6,34 k'anzi ew meřawork' meřaworac' p'ox tan zi ařc'en andrên z-kšīr-n = καὶ γὰρ ἀμαρτωλοὶ ἀμαρτωλοῖς δανείζουσιν, ἵνα ἀπολάβωσιν τὰ ἴσα 「というのは罪人たちでも、同じものを返してもらおうとして、罪人たちに金を貸しているからだ」

Goth: jah auk frawurhtai frawaurhtaim lei hvand, ei andnimaina samalaud

- 2,35 ew and k'o isk anjn anc'c'ê sówr' zi yaytnesc'in i bazowm srtic' xohowrdk' = καὶ σοῦ δὲ αὐτῆς τὴν ψυχὴν διελεύσεται ῥομφαία, ὅπως ἂν ἀποκαλυφθῶσιν ἐκ πολλῶν καρδιῶν διαλογισμοί 「そして剣があなた自身の魂を刺し貫くだろうが、それは多くの人の心の思いがあらわにされるためだ」

Goth: jah þan þeina silbons saiwala þairhgaggiþ hairus, ei andhuljaindau us managaim hairtam mitoneis

- 7,3 afač'êr z-na zi ekec'ê aprec'owsc'ê z-cařay-n nora = ἐρωτῶν αὐτὸν ὅπως ἐλθὼν διασώσῃ τὸν δοῦλον αὐτοῦ 「彼は、彼 [イエス] がやって来て彼の僕を救ってくれるよう、彼 [イエス] に頼んだ」

Goth: bidjands ina ei qimi jah ganasidedi þana skalk ið

- 4,11 <Mt 4,6: ew i veray jeřac' barjc'en z-k'ez. zi> mi erbek' harc'es z-k'ari z-otn k'o = ἐπιχειρῶν ἀροῦσίν σε, μήποτε προσκόψῃς πρὸς λίθον τὸν πόδα σου 「あなたが足を石に打ち当てないように、彼らは手であなたを持ち上げる」

Goth: ana handum þuk ufhaband, ei hvan ni gastagqjais bi staina fotu þeinana

4,11 は写本に欠けている前半部を対応箇所により補ってある。erbek'は疑問詞 erb 「いつ?」に不定の価値を有する接尾辞 -k' < idg. *kʷe が付加されたもので、機能的にギリシア語 ποτε, ゴート語 hvan に正確に対応している。次の例ではギリシア語の目的を表わす不定詞句をアルメニア語とゴート語はともに従属節で訳している:

- 4,42 argelowin z-na zi mí gnasc'ê i noc'anê = κατεῖχον αὐτὸν τοῦ μὴ πορεύεσθαι ἀπ' αὐτῶν 「彼らは、彼が自分たちのところから立ち去ってしまわないよう、彼を引き留めようとした」

Goth: gahabaidedun ina, ei ni aflipi fairra im

結果を表わす節 (result [consecutive] clause) は、ギリシア語で ὥστε + 不定詞 / 直説法または ἵνα + 接続法, ゴート語で swaei / swaswe + 直説法過去により表現される。我々の資料では minč'ew を用いた次の例に限られている⁽⁴⁾:

- 5,6 z-ays ibrew ararin. p'akec'in i nerk's bazmowt'iwn jkanc' yoyž' minč'ew parpatein owīkank' noc'a = καὶ τοῦτο ποιήσαντες συνέκλεισαν πλῆθος ἰχθύων πολὺ, διερρήσασετο δὲ τὰ δίκτυα αὐτῶν 「そして彼らがこのようにすると、おびただしい魚の群れを捕り込み、彼らの網は破れそうになった」

- 5,7 ew aknarkein orsac'ac'-n i miws naw-n. gal awgnel noc'a. ew ekin ew lc'an erkok'in

nawk'-n. minč'ew merj y-nk̄t̄mel noc'a = καὶ κατένευσαν τοῖς μετόχοις ἐν τῷ ἐτέρῳ πλοίῳ τοῦ ἐλθόντας συλλαβέσθαι αὐτοῖς· καὶ ἦλθον καὶ ἔπλησαν ἀμφοτέρα τὰ πλοῖα ὥστε βυθίζεσθαι αὐτά 「そこで彼らは、もう一艘の舟にいる仲間にも合図を送り、やって来て自分たちを手助けしてくれるように [頼んだ]。そこで彼らがやって来ると、双方の舟が満杯になって、それら [の舟] はあやうく沈むところであった」

アルメニア語では minč'ew + 不定詞 = ὥστε + 不定詞が一般的であり、minč'ew + 未完了過去によるものは上掲の 5,6 にしか見られないとされる。この節では未完了過去形 *parpatein* はその *de conatu* の機能に関してギリシア語多数本文 *διερρήσασετο* に対応しているが、構文としては、次節の ὥστε 構文におそらく影響されて滑らかにされた異読 ὥστε τὰ δίκτυα ῥησσεῖσθαι (= D) に対応する混合的な訳になっている。次節で minč'ew に続く merj 「(時間について) 近い、迫っている」は原語の現在不定詞の意味的なニュアンスをより正確に表わそうと意図されたものであり、この訳も前節と同様に異読 ὥστε παρά τι βυθίζεσθαι αὐτά (= D) に拠っている可能性が高い⁽⁵⁾。

原因を表わす節 (causal clause) に対しては、ギリシア語で基本的な ὅτι + 直説法に διότι, καθότι, ἐπεὶ, ἐπειδὴ, ἐπειδὴπερ など多様な接続詞が用いられるが、ゴート語は最も頻繁に *unte* を用いるほかに, *duþe ei*, *þande(i)*, *þatei* も直説法とともに現れる。これとは対照的に、アルメニア語では *zi / k'anzi* + 直説法しか用いられない。以下の例を参照:

- 1,7 oč' goyr noc'a ordeak' k'anzi Ehisábet' amowl êr. ew erkok'ean anc'eál ein z-awowrbk' iwreanc' = οὐκ ἦν αὐτοῖς τέκνον, καθότι (Goth: *unte*) ἦν ἡ Ἐλισάβετ στεῖρα, καὶ ἀμφοτέροι προβεβηκότες ἐν ταῖς ἡμέραις αὐτῶν ἦσαν 「彼らには子供がなかった。エリザベトが石女であり、二人とも年をとっていたからである」
- 1,13 mí erkñč'ir Zak'aria' zi lseli elen aławtk' k'o = μὴ φοβοῦ, Ζαχαρία, διότι (Goth: *duþe ei*) εἰσηκούσθη ἡ δέησις σου 「恐れるな。ザカリアよ、お前の祈願が聞き入れられたのだから」
- 1,20 eñic'es hamr ew mí karasc'es xawsel. minč'ew c'-awr-n y-owwm ayd linic'i' p'oxanak zi oč' hawatac'er banic' imoc' = ἔση σιωπῶν καὶ μὴ δυνάμενος λαλῆσαι ἄχρι ἧς ἡμέρας γένηται ταῦτα, ἀνθ' ὧν (Goth: *duþe ei*) οὐκ ἐπίστευσας τοῖς λόγοις μου 「これらのことが起こる日まで、あなたは口が開かず、ものが言えなくなるだろう。あなたが私の言葉を信じなかったためだ」 (*p'oxanak* は副詞的前置詞「～の代わりに」の意)
- 1,34 ziard? linic'i inj ayd' k'anzi z-ayr oč' gitem = πῶς ἔσται τοῦτο, ἐπεὶ (Goth: *þandei*) ἄνδρα οὐ γινώσκω; 「どうして [Arm: 私に] そんなことが起こるだろうか。私は男の人を知らないのだから」

1,47-48 c'ncac'aw hogi im y^{AC} p'rkič' im. zi hayec'aw i xonarhowt'iwn ałaxnoy iwroy =
 ἡγαλλίασεν τὸ πνεῦμά μου ἐπὶ τῷ θεῷ τῷ σωτήρῳ μου, ὅτι (Goth: unte) ἐπέβλεψεν ἐπὶ
 τὴν ταπείνωσιν τῆς δούλης αὐτοῦ 「私の心は、私の救い主なる神を喜んだ。そのはし
 ための悲惨を顧みて下さったから」

4,36 zinč'? ê ban-s ays zi išxanowt'eamb ew zawrowt'eamb sastê aysoc' p'icoc'. ew elanen = τίς
 ὁ λόγος οὗτος ὅτι (Goth: þatei) ἐν ἐξουσίᾳ καὶ δυνάμει ἐπιτάσσει τοῖς ἀκαθάρτοις
 πνεύμασιν καὶ ἐξέρχονται; 「この言葉はいったい何だ。彼が権能と力で汚れた霊ども
 に命じると、彼らは出て行ってしまうからには」

アルメニア語の時を表わす従属節 (temporal clause) は、ゴート語におけると同様に、主節に
 表現される出来事と従属節に表現されるそれとの時間の先後関係により、おおむね同時的・
 先時的・後時的状況を表わす節に分けられる。同時性を表わすアルメニア語接続詞としては
 minč', minč' deř (minč'deř), minč'ew, ibrew, yoržam などが挙げられるが (Jensen 1959: 216), 我々
 の資料においてこの意味で用いられているのは minč' が2度 (3,15. 5,34), ibrew が3度 (4,28.
 5, 19. 7,6) だけであり、以下の例に見られるように、ギリシア語で頻繁に用いられる ἐν τῷ + 不
 定詞は通常アルメニア語でも前置詞 + 不定詞で訳される。たとえば 2,6 i hasanel-n noc'a andr.
 lc'an awowrk' cnaneloy norá = ἐν τῷ εἶναι αὐτοὺς ἐκεῖ ἐπλήσθησαν αἱ ἡμέραι τοῦ τεκεῖν αὐτὴν
 「彼らがそこにいるうちに [Arm: そこに着くと], 彼女がお産をする日々が満たされた」。動詞
 hasanel 「着く, 到達する」は瞬時相的で、ギリシア語原文の εἶναι とは相も語彙の意味も異な
 っており、アルメニア語においては同時性よりも後時性に焦点ををあてた解釈が優先してい
 る⁽⁶⁾。こうした意味的な逸脱に加え、ギリシア語の不定詞を伴う対格に対して、アルメニア語
 では期待される属格に主語が置かれていることも、アルメニア語がギリシア語原文の奴隷的
 な模倣でないことを示している (Stempel 1983: 22)。

次の例では、ギリシア語の属格絶対句、ゴート語の at + 与格絶対句に対して、アルメニア語
 では minč' + 未完了過去が用いられている:

3,15-16 minč' akn ownêr žořonowrd-n' ew xorhein amenek'ean ... patasxani et amenec'own ew asê =
 προσδοκῶντος δὲ τοῦ λαοῦ καὶ διαλογιζομένων πάντων ... ἀπεκρίνατο λέγων πᾶσιν ὁ
 Ἰωάννης 「民は待ち望んでおり、皆が思いめぐらしていると, [Gk: ヨハネは] 皆に答え
 て言った」

Goth: at wenjandein þan allai managein jah þagkjandam allaim ... andhof þan Iohannes allaim
 qipands

次の例では、ギリシア語 ἐν ᾧ + 直說法現在を訳すのにゴート語では unte + 直說法現在を用
 いて「～する限りは」というような意味のニュアンスを付与しているのに対し、アルメニア
 語では minč' + 接続法現在 (ic'ê) が用いられており、叙法を変えることによって原文にはない

ニュアンスが表現されている:

- 5,34 mit'e karof? êk' mankanc' ařagasti. minč' p'esay-n ənd nosa ic'ê hraman tal parhel = μή δύνασθε τοὺς υἱοὺς τοῦ νυμφῶνος ἐν ᾧ ὁ νυμφίος μετ' αὐτῶν ἐστιν ποιῆσαι νηστεύσαι; 「あなたたちは、新婚の部屋の子らに、花婿が彼らと一緒にいる間、断食させることができるか」

Goth: ni magud sununs brupfadis, unte sa brupfads miþ im ist, gataujan fastan

後述するように、ibrew は我々の資料ではほとんどが直説法アオリストとともに用いられて後時的状況を表わすが、以下の例では、未完了過去の使用によって同時的状況が表現されていると理解される。最初の二つはギリシア語・ゴート語ともに分詞構文、最後の例はギリシア語属格絶対句、ゴート語与格絶対句である。とくに 5,19 は理由を表わすとされるギリシア語アオリスト分詞に時間的な解釈を与えている点で注目される:

- 4,28 lc'an amenek'in barkowt'eamb i žořonrdean-n ibrew lsein z-ays = ἐπλήσθησαν πάντες θυμοῦ ἐν τῇ συναγωγῇ ἀκούοντες ταῦτα 「会堂にいた人たちは皆、これを聞いているうちに、憤りに満たされた」

Goth: fullai waurþun allai modis in þizai swnagogein hausjandans þata

- 5,19 ibrew oč' gtanein t'e ənd or mowc'anic'en z-na i nerk's ... elin i tanis = μή εὐρόντες ποίας εἰσεινέγκωσιν αὐτόν ... ἀναβάντες ἐπὶ τὸ δῶμα 「彼らは、どこを通過して彼を運び込んだらいいのかわからぬまま、屋根に上った」

Goth: jah ni bigitandans huaiwa innatbereina ina ... ussteigandans ana hrot

- 7,6 ibrew oč' inč' kari heri êr i tanê-n. yľac' ař na hariwrapet-n barekams = ἦδη δὲ αὐτοῦ οὐ μακρὰν ἀπέχοντος ἀπὸ τῆς οἰκίας ἔπεμψεν φίλους ὁ ἑκατοντάρχης 「彼がその家からあまり遠くないところにいると、その百人隊長は友人たちを [Arm: 彼のもとに] 送った」

Goth: jah juþan ni fairra wisandin imma þamma garda, insandida du imma sa hundafads frijonds

先時的状況、すなわち主節に表現される出来事が従属節のそれに先行する状況を示すアルメニア語接続詞は minč'č'ew 「～する前に」(本来は「まだ～しないうちに」の意)であり、我々の資料では2箇所がこれに関わっている。ギリシア語では一方に πρὸ τοῦ + 不定詞、他方に πρὶν [ἦ] ἄν + 接続法が使われているが、ゴート語はいずれも faurþizeī + 希求法過去を示す:

- 2,21 ew ibrew lc'an awowrk' owt' t'lp'atel z-na. ew koč'ec'aw anown nora $\overline{\text{YS}}$ or koč'ec'eał êr i hreřtakê-n minč'č'ew yľac'eał êr z-na y-orovayni = καὶ ὅτε ἐπλήσθησαν ἡμέραι ὀκτῶ τοῦ περιτεμεῖν αὐτὸν καὶ ἐκλήθη τὸ ὄνομα αὐτοῦ Ἰησοῦς, τὸ κληθὲν ὑπὸ τοῦ ἀγγέλου πρὸ τοῦ συλλημφθῆναι αὐτὸν ἐν τῇ κοιλίᾳ 「さて、彼に割礼を施すための8日が満ちた時、彼にイエスという名が付けられた。これは彼が胎に宿される [Arm: [マリアが] 彼を

胎に宿す]前に,御使いによって付けられた[名]である」

Goth: jah bipe usfulnodedun dagos ahtau du bimaitan ina, jah haitan was namo is Iesus, pata qipano fram aggilau faurbize ganumans wesi in wamba

2,26 êr nora hraman aëral i hogwoy-n srboy mí tesanel z-mah. minč'ew tesc'ê z-awceal-n TÑ = ἦν αὐτῷ κεχρηματισμένον ὑπὸ τοῦ πνεύματος τοῦ ἀγίου μὴ ἰδεῖν θάνατον πρὶν [ἦ] ἄν ἴδῃ τὸν Χριστὸν κυρίου 「彼は, 主のキリストを見るまでは死を見ることはない, と聖霊からお告げを受けていた」

Goth: was imma gataihan fram ahmin þamma weihin ni saiþvan dauþu, faurbize sehvi Xristu frauþins

後者に見られる minč'ew は「～するまでは」を意味する語であるが, 写本では行の切れ目で minč'_ew と書かれており, 本来あるべき minč'ew に代わって現れた特殊な事例と考えられている (Kiinzle 1984: 476). しかし, minč'ew は福音書において πρὸ τοῦ + 不定詞のほかはすべて πρὶν [ἦ] + 不定詞に対応しており, 原則として分詞と繫辞からなる迂説法とともに用いられなければならない。一方, πρὶν + 接続法は新約聖書では見られず, 接続法と ἄν を伴った πρὶν が伝えられているのはこの箇所だけで, それ以外では πρὶν は ἕως に代えられている (Blass-Debrunner-Rehkopf 1990: 383₃). 実際, この箇所には異読として ἕως ἄν ἴδῃ も存在している。アルメニア語 minč'ew はしばしば接続法現在またはアオリストと用いて ἕως (ἄν) に対応する。たとえば, Lk 9,27 en omank' i doc'anê or aydr kan' ork' mí čašakesc'en z-mah. minč'ew tesc'en z-ark'ayowt'iwn AY = εἰσὶν τινες τῶν αὐτοῦ ἐστηκότων οἳ οὐ μὴ γεύσονται θανάτου ἕως ἄν ἴδωσιν τὴν βασιλείαν τοῦ θεοῦ 「ここに立っている者たちの中には, 神の王国を見るまでは, 死を味わうことのない者が幾人かいる」 (cf. Goth: sind sumai þize her standandane, þaiei ni kausjand dauþau, unte gasaiþvand þiudinassau gudis). こうした例から, この箇所は minč'ew ではなく, 異読 ἕως が正確に minč'ew で訳されていたと判断される。

アルメニア語で後時的状況, すなわち主節の出来事が従属節のそれに続いて起こることを表わす接続詞は ibrew, yorþam である。ibrew で訳されるギリシア語は分詞構文が最も多く, 接続詞としては普通 ὡς (1,23.41.44. 2,15.39. 5,4) が用いられるが, そのほかに ὅτε (2,21.22.42. 6,13), ἐπειδὴ (7,1), さらには属格絶対句 (4,42. 7,6), ἐν τῷ + 不定詞 (2,27) も見られる。従属節に現れる時制はギリシア語とアルメニア語においておおむね直説法アオリストであり, 後続節の出来事が ibrew 節のそれに続いて起こっていることを示している。ゴート語では孤立した用法 2,27 (mipþanei) を除いて, 接続詞はほとんど常に bipe である。以下に数例を挙げる:

1,23 ew efew ibrew lc'an awowrk' paštaman nora· gnác' i town iwri = καὶ ἐγένετο ὡς ἐπλήθησαν αἱ ἡμέραι τῆς λειτουργίας αὐτοῦ, ἀπῆλθεν εἰς τὸν οἶκον αὐτοῦ 「彼の奉仕の日々が満ちた時, 彼は自分の家に帰って行った」

- 2,39 ew ibrew katarec'in z-amenayn əst awrinac'-n $\overline{\text{T}\bar{\text{N}}}$. darján andrên i Gañilea i k'atak'-n iwreanc' Nazaret' = καὶ ὡς ἐτέλεσαν πάντα τὰ κατὰ τὸν νόμον κυρίου, ἐπέστρεψαν εἰς τὴν Γαλιλαίαν εἰς πόλιν ἑαυτῶν Ναζαρέθ 「彼らは主の律法に定められたことをすべてをなし終えた後, ガリヤヤにある自分たちの町ナザレへ帰って行った」
- 5,4 ew ibrew řeac' i xawsic'-n. asê c'-Simovn = ὡς δὲ (Goth: biþeh þan) ἐπαύσατο λαλῶν, εἶπεν πρὸς τὸν Σίμωνα 「彼は語るのを止めた時, シモンに対して言った」
- 2,27–28 ew ibrew acin cnawłk'-n z-manowk-n $\overline{\text{Y}\bar{\text{S}}}$... na ař ənkawlaw z-na i girks iwř = καὶ ἐν τῷ εἰσαγαγεῖν τοῦς γονεῖς τὸ παιδίον Ἰησοῦν ... αὐτὸς ἐδέξατο αὐτὸ εἰς τὰς ἀγκάλας αὐτοῦ 「その両親が幼子イエスを連れて入って来たところ, 彼はそれ [幼子] を両腕に受け取った」
- Goth: jah miþþanei innattauhun berusjos þata barn Iesú ... is andnam ina ana armins seinans
- 7,1 ew ibrew katareac' z-amenayn bans iwř i lselis žotovrdean-n. emowt i Kap'ařnaowm = ἐπειδὴ (v. l. ὅτε δὲ) ἐπλήρωσεν πάντα τὰ ῥήματα αὐτοῦ εἰς τὰς ἀκοὰς τοῦ λαοῦ, εἰσηλθεν εἰς Καφαρναοῦμ 「そして彼は, 彼のすべての言葉を民の耳に入れ [Arm: 終え] た後, カファルナウムに入って行った」

以上の例に見られるような過去の事実を表わす従属節と際立った対照をなしているのは、未来に起こり得る特定されない出来事を示す従属節である。この用法においてギリシア語は原則として ὅταν + 接続法を用い、アルメニア語では *yoržam* (= *y-or-žam* 'in quo tempore') + 接続法、ゴート語で *þan* + 直説法が対応している:

- 6,22 eraní ê jez yoržam naxatic'en z-jez mardik' ew yoržam orošic'en z-jez. ew naxatic'en' ew hanic'en anown č'ar z-jênj' vasn ordwoy mardoj = μακάριοί ἐστε ὅταν μισήσωσιν ὑμᾶς οἱ ἄνθρωποι καὶ ὅταν ἀφορίσωσιν ὑμᾶς καὶ ὀνειδίσωσιν καὶ ἐκβάλωσιν τὸ ὄνομα ὑμῶν ὡς πονηρὸν ἔνεκα τοῦ υἱοῦ τοῦ ἀνθρώπου 「幸いだ, あなたたちは. 人々があなたたちを憎む時, そして人の子のゆえにあなたたちを排斥し, 侮辱し, あなたたちの名を悪しきものとして唾棄する時は」
- Goth: audagai sijup, þan fijand izwis mans jah afskaidand izwis jah idweitjand jah uswairpand namin izwaramma swe ubilamma in sunaus mans
- 6,26 vái jez yoržam bari asic'en z-jênj' amenayn mardik = οὐαὶ ὅταν ὑμᾶς καλῶς εἶπωσιν πάντες οἱ ἄνθρωποι 「禍いだ, [Arm: あなたたちは.] すべての人々があなたたちをよく言う時は」
- Goth: wai, þan waila izwis qipand allai mans

これらの例でアルメニア語の接続法現在は、ギリシア語と同様に未来的な意味で用いられて

いる。次の二つの例は直説法アオリストを伴って過去の事実を表わし, *ibrew* に近い用法を持つが, *ibrew* がほとんど常に *ew* (= *καί*) または *ew etew* (= *καὶ ἐγένετο*) に続けて状況設定的な節に起こるのに対して, *yoržam* は主節に後続する点でゴート語 *pan* と平行している。4,25 *ew etew sov mec* は *ws* (= *swe*) 節に対応せず, *yoržam* 節から分離された独立文であることが句読法からうかがえる:

6,3 *č'-ic'ê? ənt'erc'eal jer z-or arar-n Dawit'. yoržam k'atc'eaw ink'n...* = οὐδὲ τοῦτο ἀνέγνωτε ὃ ἐποίησεν Δαυὶδ ὅτε (Goth: *pan*) ἐπέινασεν αὐτός...; 「お前たちは, ダビデが, 彼自身飢えた時にしたことを読んだことがないのか」

4,25 *bazowm ayrik' ein y-awowrs Eñayi i mēj ĪĪ' yoržam p'akec'an-n erkink' z-eris ams ew z-vec' amis.. ew etew sov mec ənd amenayn erkir* = πολλοὶ χῆραι ἦσαν ἐν ταῖς ἡμέραις Ἡλίου ἐν τῷ Ἰσραὴλ, ὅτε ἐκλείσθη ὁ οὐρανὸς ἐπὶ ἔτη τρία καὶ μῆνας ἕξ, ὡς ἐγένετο λιμὸς μέγας ἐπὶ πᾶσαν τὴν γῆν 「エリヤの時代にイスラエルには多くの寡婦がいた。そのとき, 天は三年と六月の間閉じられた。そこで大飢饉が全地を襲った」

Goth: *managos widuwons wesun in dagam Heleiins in Israela, pan galuknoda himins du jeram prim jah menoþs saihs, swe warþ huhrus mikils and alla airþa*

次の箇所は, ギリシア語原文の統辞法が聖書ヘブライ語によく見られるヴァヴ (*waw*) 継続法構文によって複雑にされてはいるものの, ゴート語 *pan ... pan* = ὅταν ... τότε が相関的に用いられている例である (Klein 1992: 356):

5,35 *aþþan qimand dagos, jah þan afnimada af im sa brupfads, jah þan fastand in jainaim dagam* = ἐλεύσονται δὲ ἡμέραι, καὶ ὅταν ἀπαρθῆ ἀπ' αὐτῶν ὁ νυμφίος, καὶ τότε νηστεύσουσιν ἐν ἐκείναις ταῖς ἡμέραις

Arm: *ekec'en awowrk'. yoržam barjc'i i noc'anê p'esay-n. apa pahesc'en y-awowrs-n y-aynosik* = ἐλεύσονται δὲ ἡμέραι, καὶ ὅταν ἀπαρθῆ ἀπ' αὐτῶν ὁ νυμφίος, τότε νηστεύσουσιν ἐν ἐκείναις ταῖς ἡμέραις 「しかし, 花婿が彼らから奪い去られる, まさにそのような日々が来るだろう。そのとき, それらの日々, 彼らは断食するだろう」

アルメニア語訳は, この節で問題となっているゴート語 *jah ... jah* = *καί ... καί* にあたる *ew ... ew* のような等位接続詞連続を示さない単純化された構造になっているという点でむしろ注目に値する。というのは, 以下に掲げるように, これに対応する箇所は原文に忠実に訳されているにもかかわらず, 5,35 とは訳語だけでなく句読法でも微妙なずれを示しているからである: Mt 9,15 *ayl ekec'en awowrk'-n' yoržam barjc'i i noc'anê p'esay-n. ew apa parhesc'én* = Mk 2,20 *ayl ekec'en awowrk'. yoržam verasc'i i noc'anê p'esay-n. ew apa parhesc'én y-awowr-n y-aynmik* = ἐλεύσονται δὲ ἡμέραι ὅταν ἀπαρθῆ ἀπ' αὐτῶν ὁ νυμφίος, καὶ τότε νηστεύσουσιν ἐν ἐκείνῃ τῇ ἡμέρᾳ 「しかし, 花婿が彼らから奪い去られる日々が来るだろう。そしてそのときこそ, [Mk:

その日にこそ] 彼らは断食するだろう」。すなわち 5,35 において単独で現れている *yoržam* は対応箇所と一致するが、これはギリシア語に見られるように *καί* = *ew* を挿入すると, *awowrk'* 「日々」にかかる関係副詞的な用法が曖昧になりかねず, こうした曖昧さを避けようとする配慮が働いたためではないかと考えられる。しかし, それ以上に大きな要因は, アルメニア語において関係辞と相関辞からなる真に相関的な構文は *yoržam ... apa* ではなくて, 語形成の面から見ても *yoržam ... yajnžam* = ὅταν / ὅτε ... τότε 「～する時に, その時に」であったということである。たとえば Lk 21,20 *aył yoržam tesanic'êk šowrj pateal zawrawk' z-ĒM. yajnžam gitasjĭk' t'e merj ê awr nora* = ὅταν δὲ ἴδητε κυκλομένην ὑπὸ στρατοπέδων Ἱερουσαλήμ, τότε γινώτε ὅτι ἤγγικεν ἡ ἐρήμωσις αὐτῆς 「あなたたちは, エルサレムが軍隊に囲まれるのを見る時, その時こそ, それ [エルサレム] の荒廃 [Arm: 日] が近づいていることを知れ」。これに対して *apa* の一般的な用法は *yoržam* との相関を示すというよりも, 先行する文と並列的な構造を維持しながら, 時間的な継起関係を明示することにあつた。たとえば Mt 24,14 *k'arozesc'í (アオ・接) awetarans ark'ayowt'ean ond amenayn tiezers. i vəkayowt'iwn amenayn het'anosac': ew apa ekec'ê (アオ・接) katarac* = κηρυχθήσεται (未来) τοῦτο τὸ εὐαγγέλιον τῆς βασιλείας ἐν ὅλῃ τῇ οἰκουμένην εἰς μαρτύριον πάσαν τοῖς ἔθνεσιν, καὶ τότε ἤξει (未来) τὸ τέλος 「王国の福音があらゆる異邦人に対する証しとなるために, 全世界に宣べ伝えられるだろう。そしてそのあとに, 終末は到来するだろう」。ゆえに 5,35 においてアルメニア語翻訳者は, *ἐλεύσονται ἡμέραι ... τότε νεησεύσουσιν* = *ekec'en awowrk'... apa pahesc'en* を未来における出来事の継起関係と見る解釈を明示するために, あえて単純化を試みたのではあるまいか。

ギリシア語において条件節 (conditional clause, protasis) は大きく二つの範疇に分けられる。一つは *εἰ* + 直説法 (否定は *οὐ* による) で仮定される現実を表わし, もう一つは *ἐάν* + 接続法 (否定は *μή* による) で未来の起こり得る可能性を表わすものである。アルメニア語において条件節は原則として *et'e* (稀に *t'e*) により導かれ, ギリシア語の第一の範疇には *et'e* + 直説法現在が対応し (4,3. 5,12. 6,32; cf. ゴート語 *jabai* + 希求法現在), 第二の範疇には *et'e* + 接続法が対応するが (4,7), *et'e* + 直説法も見られる (6,33.34; cf. ゴート語 *jabai* + 直説法現在)。直説法は事実あるいは事実と想定されている状況を示すのに対して, 接続法は単なる可能性が考慮されていることを示す:

- 4,3 *et'e ordi es ĀY. asá k'ari-d aydmik zi hac' lic'i = εἰ υἱὸς εἶ τοῦ θεοῦ, εἰ πὲ τῷ λίθῳ τούτῳ ἵνα γένηται ἄρτος* 「もしお前が神の子ならば, この石にパンになるように言え」 (cf. 4,9 *et'e ordi es ĀY. árĭk z-k'ez asti i vayr = εἰ υἱὸς εἶ τοῦ θεοῦ, βάλε σεαυτὸν ἐντεῦθεν κάτω* 「もしお前が神の子ならば, ここから下へ身を投じてみる」)
- 4,7 *ard dow et'e ankeal erkir paganic'es ařajĭ im. k'éz etic'i amenayn = σὺ οὖν ἐὰν προσκυνήσης ἐνώπιον ἐμοῦ, ἔσται σοῦ πάσα* 「そこでもしお前が私の面前で伏し拝むならば, すべてはお前のものになるだろう」

5,12 et'e kamis. karóť es z-is srbel = éán θέλης δόνασαι με καθαρίσαι 「もしあなたが望むならば、あなたは私を清くすることができる」

6,32-34 ew et'e sirêk' dowk' z-sirelis jer. zinč'?' šnorh ê jer' (33) ...ew et'e bari aīnêk' barerarc' jeroc'. or? šnorh ê jer' (34) ... ew et'e tayk' p'ox aynoc'ik. y-oroc' akn ownik' aīnowl. or? šnorh ê jer = καὶ εἰ ἀγαπᾶτε τοὺς ἀγαπῶντας ὑμᾶς, ποία ὑμῖν χάρις ἐστίν; ... καὶ ἐὰν ἀγαθοποιῆτε τοὺς ἀγαθοποιούντας ὑμᾶς, ποία ὑμῖν χάρις ἐστίν; ... καὶ ἐὰν δανίσητε παρ' ὧν ἐλπίζετε λαβεῖν, ποία ὑμῖν χάρις ἐστίν; 「またもし [Arm: あなたたちが] あなたたちを愛してくれる者たちを愛したとしても、あなたたちにどんな恵みがあるというのか。…また、あなたたちに良くしてくれる者たちに良くしたとしても、あなたたちにどんな恵みがあるというのか。…また取り返す望みのある者たちに金を貸したとしても、あなたたちにどんな恵みがあるというのか」

6,33-34 でギリシア語 ἐάν + 接続法に対して、アルメニア語で直説法 (aīnêk', tayk') が用いられているのは、先行する 32 節における直説法の存在とこれら連続する三つの節の構文上の類似に鑑みて、叙法の一貫性が優先されたものと説明されよう。

3. この節では動詞句における態および時制・叙法の諸相を考えてみよう⁽⁷⁾。まず態に関して、アルメニア語の動詞定形は基本的に印欧語的な能動態と中・受動態の区別を示しており、その機能もおおむね印欧祖語のそれに対応するが、形態的な観点から見ると、全面的に明確な区別を保持しているわけではない。たとえば、態の形態的標識を持たないものには次の諸形がある: -a / -ow- に終る現在語幹の直説法, -ow- に終る現在語幹の接続法, -a / -ow- に終る現在語幹の命令法, あらゆる語幹の未完了, 直説法アオリスト 1 人称複数, 接続法アオリスト 1, 2 人称複数。さらに不定詞は、ゴート語と同じように態に関して中立的である (cf. 3,7 mkrtel = βαπτισθῆναι; 6,18 bzškel = ἰαθῆναι)。以下の例に見られるように、アルメニア語においてギリシア語原文の中・受動構文をできるだけ能動構文で置き換えようとする傾向は部分的に、態範疇のこうした不均衡状態に負っているのではないかと推測される:

1,62 akn arkanein hawr-n nora t'e zinč'?' kamic'i koč'el z-na = ἐένεουον δὲ τῷ πατρὶ αὐτοῦ τὸ τί ἂν θέλοι καλεῖσθαι αὐτό 「彼らは彼の父に合図を送り、彼がその子にどんな名を付けたがっているか [うかがった]」

Goth: gabandwidedun þan attan is, þata huiwa wildedi haitan ina

2,1 éi hraman y-Awgowstos kaisarê. ašxaragir aīnel ənd amenayn tiezers = ἐξῆλθεν δόγμα παρὰ Καίσαρος Αὐγούστου ἀπογράφεσθαι πᾶσαν τὴν οἰκουμένην 「皇帝アウグストゥスから、全世界で戸口調査をせよとの勅令が出た」

Goth: urrann gagrefts fram kaisara Agustau, gameljan allana midjungard

- 2,3 ert'ayin amenek'ean mtanel y-ašxaragir y-iwraḱ'anč'iwr k'afak'i = ἐπορεύοντο πάντες ἀπογράφεσθαι, ἕκαστος εἰς τὴν ἑαυτοῦ πόλιν 「人は皆, 戸口調査の登録をするために, 各自の町へ赴いた」

Goth: iddjedun allai, ei melidai weseina, hvarjizuh in seinai baurg

- 2,4-5 él ew Yovsêp' i Gañleê ... mtanel y-ašxaragir Maremaw handerj = ἀνέβη δὲ καὶ Ἰωσήφ ἀπὸ τῆς Γαλιλαίας ... ἀπογράψασθαι σὺν Μαριάμ 「ヨセフもまたガリラヤから, マリヤムと一緒に戸口調査の登録をするためにのぼった」

Goth: urrann þan jah Iosef us Galeilaia ... anameljan miþ Mariin

これらのうち 1,62, 2,1, 2,4-5 は, ゴート語不定詞における態の中立性ゆえに, Klein が曖昧ないし不確定な部類に入るとした例であるが, アルメニア語はゴート語とは異なる手法を用いて曖昧さを排除している. 1,62 では目的語の標識 *z-* (いわゆる *nota accusativi*) によって *koč'el* は明らかに他動詞の意味をになっている. 2,1 では ἀπογράφεσθαι に他動詞 *aṛnel* を伴う分析的な表現 *ašxaragir aṛnel* をあてて, 原語の中動態と受動態のいずれにも可能な解釈を一義的なものとし, しかも原文対格 *πάσαν τὴν οἰκουμένην* に対しては場所を表わす前置詞句に置き換えて, 能動的解釈を補強している. 分析的な表現を用いるのは 2,3 および 2,4-5 でも同様であるが, ここでは動詞 *mtanel* 「入る」と方向の前置詞句からなる *mtanel y-ašxaragir* は自動詞能動的な意味が明らかである. すなわち動作主は前者においては「役人」と考えられるが, 後者では「住民」である. ゴート語は 2,3 で目的を表わすに不定詞の使用がおそらく不可能でないにも関わらず, 従属接続詞 *ei* と過去受動分詞 + *weseina* (*ist* の希求法過去) によって, 受動的解釈を鮮明にしている. 同時に, 能動的把握の傾向は, アルメニア統辞法の諸問題の中でも多く議論されてきた他動詞完了の迂説的構文の問題とも密接に関わっている (cf. Lyonnet 1933). 我々の資料からは次の例が挙げられる:

- 2,5 Maremaw handerj *z-or xawseal-n êr nma* = σὺν Μαριάμ τῇ ἐμνηστευμένῃ αὐτῷ 「人が彼の許嫁に定めていたマリヤムと共に」

Goth: miþ Mariin sei in fragiftim was imma

- 2,21 *minč'ew yfac'eal êr z-na y-orovayni* = πρὸ τοῦ συλλημφθῆναι αὐτὸν ἐν τῇ κοιλίᾳ 「[彼女が] 彼を胎に宿す前に」

Goth: faurpizei ganumans wesi in wamba

ここでも目的語標識 *z-* の存在が, *xawseal-n êr, yfac'eal êr* が他動詞完了であることを決定するのに重要な役割を果たしている. ゴート語訳は前者に対して原文とかけ離れた *in fragiftim* という動詞的でない表現を用いて意識しているが, 後者には原文に一致して受動構文があてられているのとは対照的であることが理解されよう.

- 2,26 ew êr nora hraman afeal i hogwoy-n srboy mí tesanel z-mah = καὶ ἦν αὐτῷ κεκηρηματισμένον ὑπὸ τοῦ πνεύματος τοῦ ἁγίου μὴ ἰδεῖν θάνατον 「また彼は、死を見ることはない、と聖霊からお告げを受けていた」

Goth: jah was imma gataihan fram ahmin þamma weihin ni saihvan dauþu

hraman は上掲 2,1 の ašxaragir afeal におけると同様に動詞 ařnowm 「受け取る」に依存する不特定の目的語であり、êr nora hraman afeal という分析的な表現によって原語の受動態現在完了の迂説法(属格 nora がその主語)に対応している⁽⁸⁾。

時制と叙法の問題に関して、ゴート語とアルメニア語は際立った差異を示している⁽⁹⁾。たしかにいずれの言語も、比較的単純で明瞭に分化した動詞組織を保持している点では共通しているが、その内容は異なっている。たとえば叙法に関しては、ゴート語では希求法が従属化の基本的な叙法となったのとは対照的に、アルメニア語では接続法が従属化の基本的な叙法として残存した。アルメニア語の辿った経過は、新約聖書ギリシア語において希求法が分布、頻度、用法の範囲を大幅に後退させられたのと引き替えに、接続法が従属化の支配的な叙法になったことと部分的に平行している。こうした状況に関連する領域として、間接疑問文における叙法と時制の問題が興味深い。

ゴート語において間接疑問文は、用いられる疑問代名詞・副詞および小辞などは原則として直接疑問文と変らないが、主節が現在時制動詞の場合は従属節も現在形、主節が過去時制動詞の場合は従属節も過去形という、希求法従属節(とくに目的を表わす節)における時制連続の規則にしたがって、間接疑問文でも、主節が過去時制の動詞を持つ場合、希求法過去形が後続しなければならない⁽¹⁰⁾。以下の例が示すように、ギリシア語が接続法または希求法アオリスト(5,19. 6, 11)、(現在)希求法(1,29.62. 3,15)、直説法現在または未来(6,7)と多様であっても、この規則はつねに守られている。これに対し、アルメニア語では対応する間接疑問に含まれる動詞はすべて接続法現在形で、ゴート語におけるような時制の転換は見られない: 1,29 xorhêr ênd mits t'e orpisi inê' ic'ê (= εἶη) ořjoy-n s ays 「彼女は、この挨拶はなんのことだろうと [Arm: 心の中で] 思いめぐらせていた」; 1,62 akn arkanein hawr-n nora t'e zinč'? kamic'i (= θέλοι) koč'el z-na 「彼らはその子の父親に合図をおくり、彼がその子にどんな名を付けたがっているのか [うかがった]」; 3,15 xorhein amenek'ean i sirts iwreanc' vasn Yovhannow mi t'e sa? ic'ê (= εἶη) K'S -n 「皆がその心の中で、ヨハネに関して、この人こそキリストではないか、と思いつめていた」; 5,19 ibrew oč' gtanein t'e ênd or mowcanic'en (= εἰσεπέγκωσιν) z-na i nerk's vasn amboxi-n. elin i tanis' ew i c'owoc'-n kaxec'in z-na ew ijowc'ín mahčawk'-n handerj i měj ařaji YI 「彼らは、群衆のために、どこを歩いて彼を運び込んだらいいのか分からぬまま、屋根に上り、天井から彼を吊るして [Gk: 瓦 [を剥いでそ] の間から]、担架と共に、[群衆の] 只中へイエスの前に降ろした」; 6,7 spasefn nma dpirk'-n ew p'arisec'ik' t'e i šabat'ow-n bžškic'ê (= θεραπεύει [v. 1. θεραπεύσει]) 「律法学者たちとファリサイ人たちは、彼が安息日に癒すかどうか、うかがって

いた」; 6,11 *xawsein ənd mimeans' et'e zinč'?* *ārnīc'en* (= πολήσαιεν) *YĪ* 「彼らは、イエスに対してなにをしたらよいか、互いに話し合い始めた」。Jensen (1959: 204) にしたがって、間接疑問文であることを決定する基準が人称の転換、および過去の場合にのみ時制の転換であるとするならば、ここで挙げられた例はこの基準を完全にはみだしていない。時制形の選択が主文の時制によって規定されていないからである。アルメニア語における接続法現在の使用は小辞 *t'e* (*et'e*) の機能と関わっているように思われる。新約聖書ギリシア語では間接疑問文を名詞化する *τό* (1,62) はルカ伝福音書とパウロ書簡にしか見られないが (Blass-Debrunner-Rehkopf 1990: 267₃)、アルメニア語ではこの小辞が一貫して用いられていることに注目しなければならない。この小辞が上掲の間接疑問文だけでなく、直接話法や直接疑問文、二重疑問文、また接続法とともに目的節や条件節をも導くきわめて汎用性の高い従属化標識であること (Meillet [1913: 138f.] によれば 'Konjunktion für alles'), そして時制が転換されていないという事実をも考慮に入れるならば、ここに挙げられた例は人称の点で原文にならうが、純粋な間接疑問文というよりはむしろ、接続法をも当然取り得る直接疑問文と機能的に接触した従属的な疑問文であると考えられる。写本で疑問の標識が疑問代名詞以外の成分にも付されていることも注目される⁽¹¹⁾。接続法現在の使用はそれが従属化の基本的な叙法であることとあいまって、こうした機能的な状況に由来するのであり、ゴート語における希求法過去のような時制と叙法の連鎖現象とは本質的に異なる原理がアルメニア語では働いていると判断される⁽¹²⁾。時制の範疇は相の範疇と比較して、アルメニア語動詞組織においてごく小さな位置しか占めていないという事情が、従属(間接)疑問文の構造にも反映していると言えよう。

アルメニア語で時制の差異は直説法にしか現れず、直説法現在により表示される現在と未完了過去、および直説法アオリストにより表示される過去とが対立するだけである。もとより直説法現在・未完了過去と直説法アオリストとの間に相的な差異が表現されているのではあるが、動詞の現在語幹とアオリスト語幹の使用は、接続法において、時制というよりはむしろ相の差異に基づいて決定的に制約されることになる。

ゴート語における間接疑問文の希求法過去に対して、独立節における希求法現在が (1) ギリシア語未来または接続法アオリストを訳す未来指示を有する非修辭的疑問文、(2) ギリシア語未来を訳す規範的・格言的な節、(3) ギリシア語命令法(または *μή* + 接続法アオリスト)を訳す命令文に起こっている事例を検討したうえで、Klein (1992: 365-368) は、ゴート語希求法現在が新約聖書ギリシア語の命令法および法令的未来という二つの規範的範疇に対応することを指摘し、*future / voluntative / prospective / eventual* = 直説法現在(ギリシア語未来または接続法)と *prescriptive* = 希求法(時として命令法)(ギリシア語未来または命令法または *μή* + 接続法アオリスト)の関係は規則的であって、真のゴート語統辞法に帰せられる、と結論している。アルメニア語の直説法現在に通常ゴート語のような未来指示機能は見られない⁽¹³⁾。未来時制はいずれの言語にも形態論的な範疇として存在しないが、ゴート語と対照的に、アルメニア語は接続法(大方は接続法アオリスト)を用いて未来を表わした。ゴート語ですべて希求法

現在が用いられている上記の三つの類に対してアルメニア語では次のようである:

- (1) 1,34 ziard? linic'i inj ayd· k'anzi z-ayr oč' gitem = πὼς ἔσται τοῦτο, ἐπεὶ ἄνδρα οὐ γινώσκω; 「どうしてそのようなことが [Arm: 私に] ありえましょうか, 私は男の人を知らないのだから」
- 1,66 zinč'? linic'i manowk-s ays = τί ἄρα τὸ παιδίον τοῦτο ἔσται; 「この子はどういう [子] になるのだろうか」
- 3,10 isk ard zinč'?' gorcesc'owk' = τί οὖν ποιήσωμεν; 「それでは, 私たちは何をしたらよいのだろうか」
- (2) 4,12 óč' p'orjesc'es z-TR AC k'o = οὐκ ἐκπειράσεις κύριον τὸν θεόν σου 「お前は, お前の神, 主を試みることはないであろう」
- 4,8 erkir pagc'es TN AY k'owm. ew z-na miayn paštesc'es = κύριον τὸν θεόν σου προσκυνήσεις καὶ αὐτῷ μόνῳ λατρεύσεις 「お前は, お前の神, 主を伏し拝み, 彼にのみ仕えるであろう」
- 1,13 kin k'o Ehsabet' cnc'i k'ez ordi. ew koč'esc'es z-anown nora Yovhánhês = ἡ γυνή σου Ἐλισάβετ γενήσῃ υἱόν σοι καὶ καλέσῃ τὸ ὄνομα αὐτοῦ Ἰωάννην 「お前の妻, エリザベトは, お前に一人の子を産み, その名をお前はヨハネと呼ぶであろう」
- 6,40 amenayn katareal-n elic'i ibrew z-vardapét iwri = κατηρτισμένος δὲ πᾶς ἔσται ὡς ὁ διδάσκαλος αὐτοῦ 「誰でも整えられたなら, その師のようになるであろう」 (katareal は katareal em / linim 「全き者である / となる」を意味する述語的シタグマの一部でなく elic'i と同格的に用いられたいわゆる participium coniunctum)
- (3) 3,8 ararêk' aysowhetew ptowłs aržanis apašxarowt'ean' ew mí skasanic'ik' asel + QUOTE = ποιήσατε οὖν καρποὺς ἀξίους τῆς μετανοίας καὶ μὴ ἄρξησθε λέγειν ἐν ἑαυτοῖς + QUOTE 「だから悔い改めにふさわしい実を結べ. そして, [Gk: 心の中で] ~と言い始めるな」
- 3,13 mí inč' aweli k'an z-hramayeal-n jez aīnic'êk' = μηδὲν πλέον παρὰ τὸ διατεταργμένον ὑμῖν πράσσετε 「お前たちに命じられた以上のものは取り立ててはならない」
- 3,14 mí z-ok' xowic'êk' ew mí z-ok' zrpartic'êk'. šát lic'in jez t'ošakk'-n jer = μηδένα διασείσητε μηδὲ συκοφαντήσητε καὶ ἀρκεῖσθε τοῖς ὀφωμοῖς ὑμῶν 「誰からもゆすり取るな, また誰をも恐喝するな, お前たちの給料はお前たちにとって十分であろう [Gk: お前たちの給料で満足しておれ]」

(1) では接続法現在と接続法アオリスト, (2) では接続法アオリストのみ, (3) では命令法アオリスト (ararêk') と mi + 接続法現在が現れている。命令法アオリスト以外すべて接続法が用いられているのは、ゴート語希求法と好対照をなしているように見えるが、注意すべきは、それがアルメニア語においては現在語幹とアオリスト語幹を区別していることである。動詞組織においてこれら両語幹の区別がきわめて重要な役割を果たしていることはあらためて強調しておかねばならない⁽¹⁴⁾。そしてアルメニア語で未来指示機能の表現が接続法によらざるを得ない以上、(1) と (2) については、Klein がゴート語希求法現在に対して主張するような特定の用法がアルメニア語の接続法にもあてはまるという積極的な根拠はない。(3) mi + 接続法現在についても事情は同じであろう。アルメニア語においては通常、mi + 命令法現在によって表わされる禁止文と命令法アオリストの肯定的な用法は絶対的な規則として固定されており、相の差異は中和されていた。したがって、ここで mi が命令法現在ではなく接続法現在と用いられているのは、mi の持つ本来の禁止的なニュアンスとともに、当該の命令に不確定的なニュアンスをも表示するためであったからにほかならない⁽¹⁵⁾。命令される事態にその終結点または限界を確定していないという意味では、接続法現在はギリシア語原文の規範的法令的命令に対応していると思われにくいこともない。しかし、これとてもアルメニア語における接続法現在の内的に一貫した用法であって、翻訳者が新約聖書ギリシア語の規範的範疇をとりたてて意識した結果によるかどうかは判断できない。それでは、アルメニア語の接続法は形態的・機能的に印欧語的な希求法を全く排除して、接続法しか継承していないのであろうか。この問題と関連して注目されるのは、単数 -jir, 複数 -jik' に終る接続法アオリスト 2 人称形である。これは我々の資料には 8 回現れるが、その機能はおおむね前望的であるか、あるいは接続詞により導かれる従属節において目的を表わすものである。以下の例を参照:

1,31 ew aha ylasjir' ew cnc'es ordi. ew koč'esc'es z-anown nora \overline{YS} = καὶ ἰδοὺ συλλήμψη ἐν γαστρὶ καὶ τέξῃ υἱὸν καὶ καλέσεις τὸ ὄνομα αὐτοῦ Ἰησοῦν 「そこで見よ、あなたは身重になり、男の子を産むであろう、そしてその名をイエスと呼ぶであろう」

Goth: jah sai, ganimis (ind.) in kilpein jah gabairis (ind.) sunu jah haitais (opt.) namo is Iesu

1,76 ew dów manowk margarê barjreloy koč'esjir' zi ert'ic'és ařaji eresac' \overline{TN} = καὶ σὺ δέ, παιδίον, προφήτης ὑψίστου κληθήση. προπορεύση γὰρ ἐνώπιον [v. 1. πρὸ προσώπου] κυρίου 「また、幼子よ、お前こそは『いと高き者の預言者』と呼ばれるであろう。なぜなら、お前は主の御前を歩むであろうから」

Goth: jah du, barnilo, praufetus hauhistins haitaza (ind.); fauragaggis auk faura andwairþja frauþins

5,24 aył zi gitasjik' t'e išxanowt'iwn owni ordi mardoy ... k'ez asem = ἴνα δὲ εἰδῆτε ὅτι ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου ἐξουσίαν ἔχει ... σοὶ λέγω 「しかし人の子が権能を持つことを、お前たちが知るために、私はあなたに言う」

Goth: aþþan ei witeid (opt.) þatei waldufni habaid sa sunus mans ...du þus qiþa

6,35 ew eþic'in varjĳk' jer bazowm' ew eþiĳĳk' ordĳk' barjreloy = καὶ ἔσται ὁ μισθὸς ὑμῶν πολὺς, καὶ ἔσεσθε υἱοὶ ὑψίστου 「そうすればあなたたちの報いは多くなるだろう。そしてあなたたちはいと高き者の子らとなるだろう」

Goth: jah wairþiþ mizdo izwara managa, jah wairþiþ (ind.) sunjus hauhistins

6,42 ew apa hayesĳir hanel z-siwĳ y-akanē eþbawr k'o = καὶ τότε διαβλέψεις τὸ κάρφος τὸ ἐν τῷ ὀφθαλμῷ τοῦ ἀδελφοῦ σου ἐκβαλεῖν 「そうすればその時こそ、あなたはよく見えて、あなたの兄弟の目からちり屑を取り出すことができるだろう」 (cf. Mt 7,5 καὶ τότε διαβλέψει [Arm: hayesc'es] ἐκβαλεῖν τὸ κάρφος ἐκ τοῦ ὀφθαλμοῦ τοῦ ἀδελφοῦ σου)

Goth: jah þan gaumjais (opt.) uswairpan gramsta þamma in augin broþrs þeinis

これらの例は、-ĳi- を伴う形とその前後に共起する -c'e / i- を伴う形あるいは 6,42 のように対応箇所に現れる形から判断して、文体的な変異に過ぎないと見られる。しかしながら、次に掲げる二つの例において -ĳi- を伴う接続法アオリストは明らかに Exhortativus と称される命令的な用法を示している。

6,23 owráx liĳĳk' y-awowr y-aynmik ew c'ncasĳĳk' = χάρητε ἐν ἐκείνῃ τῇ ἡμέρᾳ σικρῆσατε 「その日には喜べ、そして跳び回れ」

Goth: faginod (impv. / opt.) in jainamma daga jah laikid (impv.)

6,31 orþēs kamik' t'e arasc'en jez mardik· áynþēs arasĳĳk' ew dowk' noc'a = καθὼς θέλετε ἵνα ποιῶσιν ὑμῖν οἱ ἄνθρωποι, καὶ ὑμεῖς ποιεῖτε αὐτοῖς ὁμοίως 「あなたたちが人々からしてほしいと思うように、あなたたちも彼らに同じようにせよ」

Goth: swaswe wileid ei taujaina izwis mans, jah jus taujaid (opt.) im samaleiko

この -ĳi- を伴う形の機能が印欧語の接続法ではなく希求法に由来すると推定して、Klingenschmitt (1982: 40) は、アルメニア語 -ĳi- が本来は r, l, n- に終る非幹母音型語幹動詞語幹の後で盈度階梯希求法接尾辞 *-yē- < *yeh₁- から生じたものであろう、と仮定している。この仮定が正しいとすれば、-c'e / i- に終る接続法形およびこれと競合する -ĳi- に終る接続法形の用法の違いは、印欧語的な接続法と希求法の融合がアルメニア語では完全に達成されず、ごく部分的にせよ、印欧語における両叙法の区別がアルメニア語接続法に痕跡として残存したことによるものと理解される。

しかし、それぞれアルメニア語で接続法が残り、ゴート語で希求法が残った結果、独立用法と従属用法の両面で、一方の叙法が他方の叙法の機能を兼ね備えるにいたった過程はあたかも軌を一にしているように見えながら、アルメニア語において接続法は実際ゴート語の希求法よりも幅広く用いられていた。これは上で掲げられてきた諸例の随所に明らかに見られた

ところであるが、とりわけ関係節中に接続法を用いてギリシア語原文にはないニュアンスを見せる例も、アルメニア語接続法の使用領域の広さを示している (Meillet 1910–11 [= 1962]: 105):

- 3,11 oyr ic'en erkow handerjk'. tac'ê z-min aynm oyr oč'-n gowc'ê ew oyr kavc'ê kerakowr noynpês arasc'ê = ὁ ἔχων δύο χιτῶνας μεταδότη τῷ μὴ ἔχοντι, καὶ ὁ ἔχων βρώματα ὁμοίως ποιείτω 「下着が二枚ある者は、ない者に一枚与えよ。また食物がある者も同じようにせよ」

Goth: sa habands twos paidos gibai þamma unhabandin, jah saei habai (opt.) matins, samaleiko taujai

- 6,35 towk' p'ox owsti oč' akn ownic'ik' ařnowl = δανίζετε μηδὲν ἀπελπίζοντες 「取り戻すことが期待できないような者に [Gk: 少しも失望することなく] 金を貸せ」

Goth: leihvaid ni waihtais uswenans

- 6,48 nmán ê ařn or řinic'ê town = ὁμοίός ἐστιν ἀνθρώπῳ οἰκοδομοῦντι οἰκίαν 「彼は、家を建てようとする人と同じだ」

Goth: galeiks ist mann timrjandin razn

6,35 はギリシア語現在分詞の ἀπ- に配慮して関係副詞 owsti 「そこから」を用いたことで、結果的に複雑な構文になってはいるが、ギリシア語原文の一つの解釈を正確に表現しようと試みたものである。

無論、接続法がこのように柔軟に用いられている例は関係節に限らない。たとえば Lk 9,62 oč' ok' arkanê jeřn z-mačov' ew havic'i yets = οὐδεὶς ἐπιβαλὼν τὴν χεῖρα ἐπ' ἄροτρον καὶ βλέπων εἰς τὰ ὀπίσω 「鋤に手をつけてから後ろを振り返る者は一人もいない」、cf. Goth: ni manna uslagjands handu seina ana hohan jah sailbands aftra. また、ギリシア語の二つの未来形がそれぞれアルメニア語で直説法現在と接続法現在で訳され、ゴート語でも直説法現在と希求法現在に置かれている例が注目される: Mk 9,39 oč' ok' ê or ařnê zawrowt'iwns y-anown im. ew karic'ê hayhoyel z-is = οὐδεὶς ἐστιν ὃς ποιήσει δύναμιν ἐπὶ τῷ ὀνόματί μου καὶ δυνήσεται ταχὺ κακολογήσαί με 「私の名で力ある業を行い、[Gk: すぐに] 私の悪口を言えるような者は一人もいない」、cf. Goth: ni mannahun ist saei taujiþ maht in namin meinamma jah magi sprauto ubilwardjan mis. この用法はいわゆる Conj. consecutiv (Jensen 1959: 118) であり、第二の動詞が第一の動詞に示されている行為に関連して起こり得る一つの結果を表わしていると解釈されて接続法が用いられている (cf. Meillet 1910–11 [= 1962]: 107 f.). もとよりこうした用法は義務的ではないだけに、アルメニア語翻訳者の接続法に対する語感が柔軟に発揮されたものと理解される。

4. おそらくアルメニア語的特徴ゆえに、翻訳がときとして不正確に見えることがある。これには明らかに誤訳と認められる極端な場合もあれば、逐語訳では文意が理解されにくいと翻訳者が判断した原文に対しては、ある程度の不正確さが生じる恐れがあっても、それを敷衍して意識する場合もある。広義にはこうした誤訳や意識をも含め、新約聖書ギリシア語文法と古アルメニア語文法との間に予想され得る一定の範疇的対応を逸脱した統辞的に原文と異なる訳を、ここでは異訳と呼ぶことにする。訳自体が正確であるか否かを問わず、そのような異訳には、アルメニア語に固有と考えられる統辞的特徴が看取されることがあり、原文への忠実さを犠牲にしても、自らの言語らしい構文を優先させた事例と言えるかもしれない。以下に掲げる例は、ギリシア語分詞構文に二つの動詞の等位構造をあてた異訳である。未完了過去形が最初の例では接続詞 *ew*、次の例では (*oč' ...*) *ayt* により結合されている:

- 1,64 xawsêr ew awhmêr z-AC̄ = ἐλάλει εὐλογῶν τὸν θεόν 「彼は語り始めて、神を祝福していた」
- 2,37 or oč' meknêr i tačarê-n' ayt pahawk' ew aławtw'iwk' paštêr = ἢ οὐκ ἀφίστατο τοῦ ἱεροῦ νηστείαις καὶ δεήσεσιν λατρεύουσα 「彼女は神殿から離れようとせず、断食と祈願をもって仕えていた」
- 2,48 hayr k'o ew es tařapeák' xndreak' z-k'ez = ὁ πατήρ σου κάγω ὀδυνώμενοι ἐζητοῦμέν σε 「お前の父と私は苦しんでお前を探していた」
- 6,1 ařakertk'-n nora korzein hask' řp'ein ənd ap' ew owtein = ἐπιλλον οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ καὶ ἦσθιον τοὺς στάχυας ψάχοντες ταῖς χερσίν 「彼の弟子たちは穂を摘み、手で揉んで食べ始めた」

2,48 では接続詞を伴わずに未完了過去が等位化されているが、M 写本には分詞 *tařapealk'* (nom. pl.) が現れているから、ギリシア語と同じような構文も可能であったことが分かる。しかし、いわゆる *participium coniunctum* は一般に完了相に属する形態であって、主動詞の出来事に先行する事態を表わすのに用いられるために、主動詞と同時進行的な事態には他の表現が求められた。これらの例が示しているように、等位化された動詞がともに未完了過去であることも、こうした相的な制約のもとで等位化が好まれたことと無縁ではない。最後の例は、*καὶ* 以下がギリシア語でアルメニア語と似た語順を持つ写本があるが、分詞構文であることに変わりはなく、この場合はむしろアルメニア語訳の方が原文よりも正確に意味を伝えていると言える。次の例は未完了過去による等位化ではないが、ギリシア語の分詞構文を等位化し、前節で述べたように第二の動詞に接続法を使用している点で注目される:

- 5,39 oč' ok' əmpê z-hin-n ew kamic'i nor-n = οὐδεὶς πῶν παλαιὸν θέλει νέον 「誰も古い [葡萄酒] を飲んで、新しい [葡萄酒] を欲しがる者はいない」

Goth: ainshun drigkandane fairni, ni suns wili jugg

ゴート語の分詞 drigkandane は ainshun にかかる男性複数属格の名詞的用法でギリシア語と異なるが、いずれにせよ、これらすべての例においてゴート語訳はギリシア語にならって分詞構文を示しており、等位化の傾向はアルメニア語に固有の統辞的現象と言って差し支えないであろう。

5. 本稿で扱われた問題はアルメニア語統辞法のごく一部に過ぎないが、これだけでも、アルメニア語における統辞的諸現象が新約聖書ギリシア語の統辞法からは独立した規則に支配されていることを明らかに示している。同時に、形式上それぞれ別箇に扱われた範疇が互いに密接に関連していることも事実である。動詞句について言えば、アルメニア語では叙法・時制に加えて相の範疇も無視できない。関係節や等位構造の問題自体は機会を改めて考察されねばならないが、これを付随的に扱ったのも、ギリシア語やゴート語とは異なり、アルメニア語においては動詞的諸範疇の機能がこれらの構造に自在に顕現していると考えたからにほかならない。

アルメニア語の統辞法が他の印欧語には見られない顕著な特徴をいくつか持っていることは従来より指摘されているが、アルメニア語がそれだけで一派をなす言語であるゆえに、ゲルマン諸語におけるような比較文法が成立しないという事情に加え、隣接する非印欧諸語に帰せられる影響などが、アルメニア語統辞法の研究にも多くの困難をもたらしてきた。ゲルマン語最古の文語として、ゴート語が印欧語比較統辞法の研究に占める大きな位置から見れば、アルメニア語はほとんど無視されてきたといつて過言ではない。しかしながら、アルメニア語とゴート語が互いにさほどの時を隔てず聖書翻訳文献を有するという事実は、新約聖書ギリシア語文法をいわば共通の土台として、両言語の文法の共時的分析が比較統辞法の研究に少なからず貢献する可能性を保証している。しかも、ゴート語が翻訳文献のみを残して歴史の舞台からほぼ完全に姿を消してしまったのとは対照的に、アルメニア語は長い言語的伝統を今日にいたるまで保持している。アルメニア語統辞法が印欧祖語的特徴をどれだけ継承しているのか、またどのような独自の特徴を発展させてきたのかといった問題を明らかにするためにも、最古のテキストである福音書を中心とした古アルメニア語の内的分析は不可欠の基礎を提供するであろう。

注

- (1) 古アルメニア語は、5世紀前半の黄金時代 (oskedar) とされる時期のアルメニア語最古の言語形態 (grabar「文語」とも称される) であり、この文語の現存する最古の文献が聖書翻訳 (410年頃終了; ただし現存する写本としては887年書写のものが最も古い) で

ある。古アルメニア語福音書の最も初期の形態は古シリア語訳、おそらく福音書の対観書 (Metzger 1977: 167) から訳されたが、その後ギリシア語テキストに拠って直接に翻訳し直されたというのが一般的な見方である。Schmitt (1981: 21) は次のように総括している: 'Bei der endgültigen Übersetzung der Bibel in ihrer Gesamtheit wurde [...] ein griechischer Text zugrunde gelegt.' Künzle による校訂本は E 写本 (989 年書写) の「良好かつ正確な」 ('bon et correct' [1984.1: 52]) テキストを底本として採用し、M 写本 (887 年書写) における異読は各頁に脚注として掲げている。両写本に関する限り、ギリシア語 D (Codex Bezae, [5/]6 世紀) および Θ (Codex Koridethi, 9 世紀) が本文的にきわめて近いとされている。その作成時期は 9 世紀から 10 世紀であって中世アルメニア語に移行する以前に相当し、古アルメニア語による福音書の成立期との間には 4-5 世紀の隔たりがあるが、これらの写本にはその作成時期の言語的特徴がごくわずかしか見られないことから、作成者の古アルメニア語的な規範意識は比較的顕著であったと考えられている。特に E 写本のテキストは、対応箇所間の調和化 (Harmonisierung) がきわめて稀であるという事実により、統辞法をはじめとする古アルメニア語文法の諸領域を考究するうえで資料的価値が非常に高い。

- (2) 本稿で用いた資料は、Klein (1992) と同じく Lk 1,1-7,9 のテキストである。引用はすべてアルメニア語 Künzle (1984), ゴート語 Streitberg (1919), 新約聖書ギリシア語 Nestle-Aland (1979) に拠るが、アルメニア語については、*e* を *ê* としたほかに、語形の内部にハイフンを適宜挿入して目的語標識、前置詞、後置冠詞などの境界を明確にした。
- (3) 3,14 *ew mek' zinč' gorcesc'owk' = jah weis hua taujaima?* に対して、Streitberg の Vorlage は *καὶ ἡμεῖς τί ποιήσωμεν;* であり、Nestle-Aland (1979) は *τί ποιήσωμεν καὶ ἡμεῖς;* を採用するが、アルメニア語・ゴート語と語順を同じくする写本が参照されている。
- (4) アルメニア語では *minč'ew* のほかにも次のような例が見られる: Mt 8,28 *č'arač'ark' yoyž. orpēs zi č'-êr hnar anc'anel owmek' ənd ayn čanaparh = χαλεποὶ λίαν, ὥστε μὴ ἰσχύειν τινα παρελθεῖν διὰ τῆς ὁδοῦ ἐκείνης,* cf. Goth: *sleidjai filu, swaswe ni mahta manna usleiþan þairh þana wig jainana* 「彼らはひどく凶暴で、誰もその道を通り過ぎることができないほどだった」; Mk 3,20 *gay miwsangam ənd nosa žoʎovowrd-n. minč' zi ew (M: minč'ew) hac' ews óč' žamanel owtel noc'a = συνέρχεται πάλιν ὁ ὄχλος, ὥστε μὴ δύνασθαι αὐτοὺς μηδὲ ἄρτον φαγεῖν,* cf. Goth: *gaiddja sik <aftra> managei, swaswe ni mahtedun nih hlaiþ matjan* 「再び群衆が [Arm: 彼らのもとに] 集まって来るので、彼らはパンを食べることすらできないほどである」。
- (5) Burton (1996: 92) は欽定訳 (1611) をはじめとする英語諸訳を比較して、それらの読みの多様性から、*διερρήσσετο δὲ τὰ δίκτυα αὐτῶν* という読みが多く of the聰明な読者によってあまりに唐突なものと感じられ、これと同じような印象がギリシア語筆写生にも容易に起こり得たかもしれないこと、そして諸訳が厳密に逐語的な訳から逸脱しているよう

- に見える場合、根底にあるギリシア語テキストを同定することがきわめて困難であることを指摘している。しかし、筆写生の側における異本・異読の知識を背景として筆写生自身の解釈が写本作成に介入する可能性は十分に予想されるし、この問題自体は大変興味深い、最終的には決着し得ない性格のものであろう。
- (6) 同じような逸脱は次の例にも見られる: 5,12 i hasanel-n nora i mi k'afak'ac'-n ... ayr mi li borotowt'eamb ... afač'eac' z-na ... = ἐν τῷ εἶναι αὐτὸν ἐν μιᾷ τῶν πόλεων ... ἀνὴρ πλήρης λέπρας ... ἐδεήθη αὐτοῦ ... 「彼がある町に着くと [Gk: 滞在していた際], 全身らい病の [Arm: 一人の] 者が …彼に嘆願した」, cf. Goth: mippanei was in ainai baurge ... manna fulls prutsfillis ... bad ina.
- (7) Meillet (1910–11 [1962]) はアルメニア語動詞人称形における態・相・叙法・時制などの用法の注目すべき諸相を扱った基本的な研究であり、貴重な示唆に富んでいる。
- (8) Benveniste (1959: 62, 60 f.) は完了の所有構文的な解釈に基づき、ギリシア語受動態に対してアルメニア語能動態完了が標識 z- を伴わずに対応する例として、『ルカ伝』からこの箇所と 23,15 oč' inč' mahow aržani ê gorceal dora = οὐδὲν ἄξιον θανάτου ἐστὶν πεπραγμένον αὐτῷ 「彼は死に価するようなことは何もしていない」を引用している。なお、次の箇所は、ギリシア語中動態が完了によって訳されているが曖昧な例である: 4,10 hreštekač' iwroc' patowireal ê vasn k'o. pahal z-k'ez = τοῖς ἀγγέλοις αὐτοῦ ἐντελείται περὶ σοῦ τοῦ διαφυλάξαι σε 「[Gk] 彼はお前のために、御使いらに指示するであろう、お前を守るために」。主語が明示されていないので、自動詞的能動的に「指示した」か、あるいは受動的に「指示された」と解釈され得るが、いずれにしてもギリシア語の未来時制とは一致しない。
- (9) 古アルメニア語と新約聖書ギリシア語における動詞のおおよその範疇的対応については Rhodes (1977: 180–181) 参照。
- (10) 間接疑問における時制の選択は、目的を表わす節におけるそれと密接に関連しているとしたうえで、Delbrück (1900: 285) は次のように説明している: “Da im Gotischen der Subjunktiv in der Frage einem griechischen Indikativ entsprechen kann (*hva sijai* gleich τί ἐστίν), so darf man wohl annehmen, dass allen diesen Subjunktiven Perfekti Subjunktive Präsens vorhergegangen sind, so dass man also zunächst sagte: *frah hva sijai*, dann *hva vesi*. Demnach war der Subjunktiv im abhängigen Fragesatz aus den unabhängigen Sätzen herübergenommen, nach einem präteritalen Hauptsatze aber wurde der Subjunktiv des Präsens zum Subjunktiv des Perfekts verschoben. Diese Verschiebung war im Gotischen eingelebt, denn es giebt kaum Ausnahmen.”
- (11) 疑問の標識が付された従属間接疑問文として次の例を参照: Mk 8,23 ew harc'anêr c'-na t'ê tesanic'ê? (3. sg. subj. pres.) inč' = ἐπιρώτα αὐτόν· εἴ τι βλέπεις; 「彼は彼に、何か見えるか、とたずねた」。ギリシア語は直接疑問文であるが、βλέπει とする写本もある。

- (12) また、ギリシア語の不定詞付き対格を内容とする分詞構文が、接続法現在を伴う t'e によって導かれている例も参照: 2,44 karcein z-nmanê t'e ənd owłekic's-n ic'ê = νομίσαντες δὲ αὐτὸν εἶναι ἐν τῇ συνοδίᾳ 「彼らは、彼が道連れの人々の中にはいるのではないかと思った」
- (13) 強調が関わっている場合には、ギリシア語の未来が直説法現在によって訳されることもある。たとえば Jh 20,25 óç' hawatam = οὐ μὴ πιστεύσω 「私は絶対に信じない」。
- (14) ギリシア語未来に対してそれぞれ接続法アオリスト・現在を用いた次の例を参照: 1,20 elic'es hamr ew mí karasc'es xawsel. minč'ew c'-awr-n y-orowm ayd linic'i = ἔση σιωπῶν καὶ μὴ δυνάμενος λαλῆσαι ἄχρι ἧς ἡμέρας γένηται ταῦτα, cf. Goth: sijais þahands jah ni magands rodjan und þana dag ei wairpai þata 「このことが起こる日まで、あなたは口がきけず、ものが言えなくなるだろう」; 5,10 y-aysm hetê z-mardfk orsayc'es i keans = ἀπὸ τοῦ νῦν ἀνθρώπους ἔση ζωγρῶν, cf. Goth: fram himma nu manne siud nutans 「今から後、あなたは人間を生け捕るだろう」。
- (15) mi + 命令法現在 / 接続法現在の揺れは随所に見られる。たとえば, Mt 10,26 mí ... erkñ'ic'ik' (2. pl. subj. pres.) 「恐れるな」... (28) mí erkñ'ic'ik' (2. pl. impv. pres.; M: mi erkñ'ic'ik') ... aył erkerowk' (2. pl. impv. aor.) 「恐れよ」... (31) mí erkñ'ic'ik' (M: mi erkñ'ic'ik').

参考文献

- Benveniste, Emile (1959) "Sur la phonétique et la syntaxe de l'arménien classique," *BSL* 54, 46–68.
- Blass, Friedrich and Albert Debrunner (1990) *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*¹⁷, Bearbeitet von Friedrich Rehkopf, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Burton, Philip (1996) "Using the Gothic Bible: Notes on Jared S. Klein 'On the Independence of Gothic Syntax'," *The Journal of Indo-European Studies*, 24, 81–98.
- Delbrück, Berthold (1900) *Vergleichende Syntax der indogermanischen Sprachen*, Dritter Teil, Strassburg: Karl J. Trübner.
- Jensen, Hans (1959) *Altarmenische Grammatik*, Heidelberg: Carl Winter.
- Klein, Jared S. (1992) "On the Independence of Gothic Syntax, I: Interrogativity, Complex Sentence Types, Tense, Mood, and Diathesis," *The Journal of Indo-European Studies* 20, 339–379.
- Klingenschmitt, Gert (1982) *Das altarmenische Verbum*, Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Künzle, Beda (1984) *Das altarmenische Evangelium*, 2 Teile, Bern / Frankfurt am Main / New York: Peter Lang.
- Lyonnet, Stanislas (1933) *Le parfait en arménien classique*, Paris (Collection Linguistique, publiée par la Société de Linguistique de Paris, 37).
- Meillet, Antoine (1910–11) "Recherches sur la syntaxe comparée de l'arménien, IV: Emploi des

- formes personnelles des verbs.” *MSL* 16, 92–131. [Reprinted in Meillet (1962), 83–122]
- Meillet, Antoine (1913) *Altarmenisches Elementarbuch*, Heidelberg: Winter.
- Meillet, Antoine (1962) *Études de Linguistique et de Philologie Arméniennes*, I, Lisboa: Imprensa Nacional.
- Metzger, Bruce M. (1977) *The Early Versions of the New Testament: Their Origin, Transmission, and Limitations*, Oxford: Clarendon Press.
- Nestle, Erwin and Kurt Aland (eds.) (1979) *Novum Testamentum Graece*, 26. neu bearbeitete Auflage. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft.
- Rhodes, Errol F. (1977) “Limitations of Armenian in Representing Greek.” in: Metzger (1977), 171–181.
- Schmitt, Rüdiger (1981) *Grammatik des Klassisch-Armenischen mit sprachvergleichenden Erläuterungen*, Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Stempel, Reinhard (1983) *Die infiniten Verbalformen des Armenischen*, Frankfurt am Main / Bern / New York: Peter Lang.
- Streitberg, Wilhelm (ed.) (1919) *Die gotische Bibel*², sechste, unveränderte Auflage, 1971, Heidelberg: Carl Winter.

(東北大学文学部 助教授)

chigusa@sal.tohoku.ac.jp